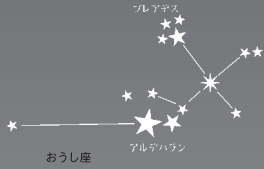


ポラリスを仰ぐ北の大地から



日高自動車道延伸効果と 将来への期待

日高医師会 会長 小松 幹志

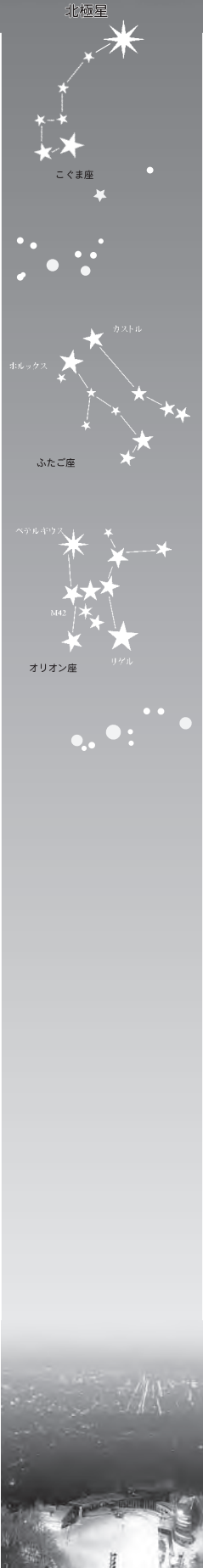
日高自動車道「日高門別IC～日高厚賀IC」が本年4月21日開通した。開通により期待される効果として1. 夏いちごの生産拡大、2. 救急輸送の迅速性・確実性の向上、3. 競走馬輸送の安全性向上ならびに4. 観光入り込み客・交流人口の増加などが期待される。これら効果の中で救急輸送について検討してみた。

「道路整備による救急医療便益」(交通工学vol.45)という論文の中で心筋梗塞(中等症以上)、脳梗塞(全体)、大動脈解離(全体)および重症多発外傷(ISS18以上)の疾患別の搬送時間と生存率の関係式によると、Y=生存率とX=搬送時間(分)の関係は急性心筋梗塞で $Y = -0.0160X + 1.1552$ 、脳梗塞で $Y = -0.0048X + 1.0412$ 、大動脈解離が $Y = -0.0112X + 1.0694$ 、そして多発外傷が $Y = -0.0119X + 0.9208$ であった。これらより生存率 $Y = 0$ の場合のXの値を計算すると、急性心筋梗塞72.2分、脳梗塞216.9分、大動脈解離95.5分そして多発外傷77.4分となった。ここから覚知～現場発時間を控除すると、搬送にかけることができる時間は急性心筋梗塞で53.9分、脳梗塞197.7分、大動脈解離77.1分そして多発外傷54.5分となる。ということはたとえば脳梗塞では、道路整備により搬送時間が15分短縮した場合、救急患者の生存率が7.2%向上することになる。

これを日高自動車道に当てはめると、新ひだか町静内まで道路整備が進んだ場合、苫小牧市内の急性期病院へのアクセスが最大で約23分短縮される。脳梗塞と大動脈解離の搬送患者発生率はそれぞれ11.98人/万人と1.95人/万人で新ひだか町人口が22714人(平成30年3月31日現在)であることから脳梗塞で3.00人、大動脈解離で1.14人救命することができる。そうすると1人あたりの人命価値を2.26億円/年とした場合、合計で単年度9.36億円の効果が得られることになる。

ただ静内までの延伸にはあと8～10年のはかかると言われており、私の在職中にその恩恵に預かることはないようだ。また急性心筋梗塞ならびに多発外傷に関してはそれでも救命率は上がらない。このため日高管内における新ひだか町立静内病院のように、急性心筋梗塞に対する治療可能な病院は我田引水ながら必要だと考える。

最後に、JR日高線の将来が見通せない中、日高自動車道の延伸は日高管内の住民だけでなく医療従事者にとっても大いに期待されるもので、いずれは浦河まで伸びてくれることを祈っている。



手打ち蕎麦に魅せられて

岩見沢市医師会 会長 竹内 文英

蕎麦を打ち始めて25年になる。初めのころは、指南本を片手に初心者用蕎麦打ちセットで作ったものだ。出来栄は、いまひとつだった。

ある日、群馬県の友人宅を訪れたときに、隣の栃木県の喫茶店に案内された。その自家焙煎の水出しコーヒーもおいしかったが、ご主人が趣味で打った蕎麦は、絶品であった。ご主人は店の客であった片倉康雄氏(現代の蕎麦技術の体系を築き、バイブル的な著書を残した)から蕎麦道具の製作を習い、蕎麦を打つまでになったという。兄弟子には、幌加内に蕎麦打ち技術を伝え、町おこしをした高橋邦弘氏が有名である。ご主人は片倉氏の5番目の愛弟子ということであった。

この出会いは私の蕎麦熱を一気に上昇させた。週末ごとに電話で教を乞い、じきにご主人が喫茶店を蕎麦屋へと転業させると、わざわざ蕎麦を食べるためだけに行くようになった。10年ほど前にスカイマークの新千歳一茨城線が就航してアクセスが良くなってからは毎年足を運んでいる。

店のメニューは決して多くはないが、シンプルで蕎麦の香り立つものばかりで、友人らと少しずつ全種類を、二日続けて食べて帰ってくる。特に蕎麦の実の芯の部分のデンプン質だけで打つさらしな蕎麦は種類も多く絶品である。店の前には、いつ行っても行列ができていて、東北、九州からも客が来る。

あの日以来、私はご主人のことを勝手に師匠だと思っている。師匠の親切な教えの甲斐あって、私の蕎麦は年越しに振る舞えるまでに上達した。しかし、驚いたことに、師匠の蕎麦は今も日々進化を続けているのだ。時には、蕎麦の常識を覆すような試みを繰り返し、技術を向上させている。その研究熱心な姿には到底追いつけそうもない。